

プロフィール

学部時代は国際関係学を専攻。卒業後は日系素材メーカーにてサプライチェーン関連の仕事に携わり、外資系コンサルティング会社に転職後は、主に組織の人材マネジメント及び若手人材育成等に従事。その後、サセックス大学（イギリス）にて中東のシリア難民に関する研究を行い、貧困開発の修士号を取得。UNICEF ヨルダン事務所にて青年の職業技能訓練・雇用促進プログラムにインターンとして取り組んだのち、本事業に参加。2019年6月、UNICEF インドネシア事務所に国連ボランティアとして派遣され、青少年のスキル教育、政治・社会参画、メンタルヘルスに関する活動支援等に従事。本事業での派遣期間満了後、同事務所との間で派遣契約を延長し、活動を継続。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

国内研修を通じて、平和構築・開発分野における知見を高めたうえで、海外派遣先にて実際にフィールド経験を積むことができることに、大きな魅力を感じたからです。民間企業からキャリアをスタートした身として、当分野で仕事を獲得していくうえでは、特にフィールド経験を積むことが何よりも大切だとわかっていたため、大学院に進学する時点で、卒業後は本事業に必ず参加したいと考えていました。

2. 国内研修に参加した感想は？

平和構築・開発分野における知見を深めるとともに、かけがえのない人脈を築くことができ、大変満足しています。理論と実践の二段構成で学ぶプログラムだったため、処理すべき情報量も多く、毎日があっという間に過ぎていきました。特に、この分野において長らく活躍されてきている大先輩方に、まとまった期間、集中してご指導いただける機会はなかなかないので、非常に貴重な機会だったと感じています。また、合宿型の研修である為、他の研修生と朝から晩まで共に過ごし、講義の内容以外にも人生やキャリア等様々なことを語り合うなかで様々な気づきを得ることも多かったです。特に外国人研修員には紛争国の出身者も多く、彼らのリアルな体験、また母国の平和構築にかける思いを聞くたびに沢山の刺激を受けました。

3. 海外派遣での活動について教えてください。

海外派遣では、UNICEF インドネシア事務所にて、青少年育成の活動支援に従事しました。インドネシア事務所での青少年育成は、教育セクション下の青少年チームとコミュニケーションセクション下のイノベーションチームが主に担当しており、私はイノベーションチームへの配属でした。派遣後しばらくの間は、青少年のスキル育成プログラム支援、また U-Report（※）を利用した青少年の政治・社会参画推進や、他セクションの事業の活動・モニタリング支援などが主な業務内容でしたが、2020年3月からは、世界的に広まった新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19）関連の業務も加わり、青少年のエンパワメントキャンペーンやメンタルヘルス領域の事業の企画、実施にも携わりました。

(※) [U-Report](#)とは、SNS (Facebook、WhatsApp、LINE等) やSMSを媒体に青少年の声を収集するため UNICEF が開発したオンラインツールで、現在世界 65 カ国以上で活用されており、登録者数は 1000 万人以上。インドネシアでは 2016 年頃に立ち上げられ、2020 年 6 月末現在で 20 万人以上の登録者がいる (うち 88% が 24 歳以下)。

青少年のスキル育成プログラムは、ジャカルタ近郊の中学校、高校、職業訓練校など 20 校に通う 500 人を対象とした、自分たちやコミュニティにとって身近な問題をデジタルテクノロジーで解決することを目指した事業です。プログラムの推進役であるメンター及び先生向けワークショップから始まり、複数回の青少年向けワークショップを経て、最終的に選出された 6 チーム 18 名が、アイデアを具現化するブートキャンプに参加。各チームで、メンタルヘルス、ドラッグ、環境、いじめ、人種差別などそれぞれが課題だと思う問題を解決する手助けとなるアプリ開発に着手しました。私は、プログラムの担当として、事業の管理、モニタリングの他、本パイロット事業を次年度に拡大継続するための提案書作成や、事業効果を定性的に発信するための広報記事の作成コーディネーション、及び参加者たちの制作発表会向け各種調整等、幅広い業務に携わりました。(UNICEF

Indonesia ウェブサイト掲載記事：[第一弾](#)・[第二弾](#))



毎週末開催のブートキャンプに参加する青少年たち



参加者に広報記事のためのインタビュー実施中



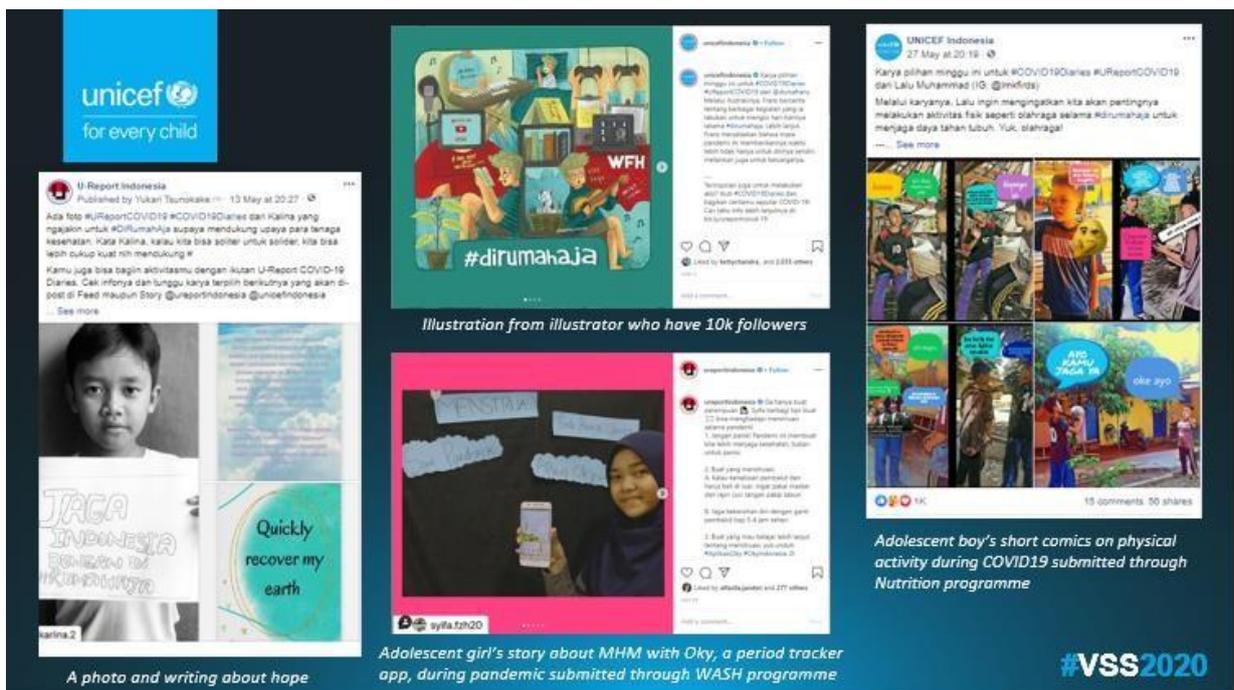
南スラウェシの U-Reporter の青少年たち

集約をサポートしています。アンバサダー制度など、青少年たち自身が活動の主役となるインセンティブを導入したことで、結果として 5000 人の青少年の声を集め、分析し、地域の議会に提出することができました。

U-Report に関する活動では、様々なフィールドオフィスやプログラムセクションと協業させていただきました。一例として、南スラウェシ島のフィールドオフィスと協力し、地域の意思決定プロセスに青少年たちの声を反映させるサポートをしました。当地域では、子どもにとってやさしい街づくりの実施を目的に、毎春行われる予算・計画作成の議会に地域の子どもフォーラムの代表が会議に直接参加しますが、より多くの青少年たちの声を彼らが代弁できるようにするため、UNICEF が U-Report を通じて意見の

また、各セクションの事業支援は、主に既存の事業の改善、もしくは事業領域に関する政策提言に使用するデータの収集を目的として行いました。活動の一例としては、COVID-19の拡大が青少年の栄養に及ぼす影響の調査で、約6000人の回答を得て、データを分析し、栄養セクションへ結果を共有しました。この活動を行う際は、毎回FacebookやInstagram広告を活用することで、より多くの声をすく上げる工夫をしました。

2020年3月にCOVID-19がインドネシアで拡大してからは、上述の活動に加えて、特にパンデミックに対応した2つのキャンペーン及びプログラムの立ち上げから実施まで担いました。一つ目は、COVID19Diariesという青少年のエンパワメントを目的としたオンラインキャンペーンです。学校閉鎖や社会活動の停止など日常生活が変化したなかで、どのような考えや気持ちを持ち、日々どのように過ごしているかを専用のハッシュタグをつけてSNSで発信してもらい、UNICEFとU-ReportのSNSアカウントが優れた作品を紹介することで、全国の青少年たちをオンラインで繋げ、みんなで危機を乗り越えようとエンパワーする取り組みです。4月末に[キャンペーン特設サイト](#)を立ち上げ、6月末時点で550作品以上が投稿され、40作品以上を取り上げてきました。7月現在も、インドネシアにおいてはCOVID-19の感染拡大は歯止めがかかっておらず、先行きが不透明な状況が続いているため、新たな取り組みなどを織り交ぜながら、本キャンペーンを引き続き継続、拡大させていく予定です。



選出作品例。未来への希望、社会活動の制限下での運動の継続や生理衛生管理を呼びかけるものなど多岐にわたる

また、U-Reportの調査などを通じて、COVID-19による社会活動の制限に伴い、青少年を取り巻く大きな問題の一つとしてメンタルヘルスのテーマが顕在化したため、子供の保護セクション及び教育セクションの青少年チームの協力を得ながら、プログラムの企画、実施、推進もさせていただきました。社会心理サポートサービスを提供しているインドネシアでも著名なNGO、及びメンタルヘルス専門の社会的企業と連携し、100名を対象としたオンラインセッションを実施しまし

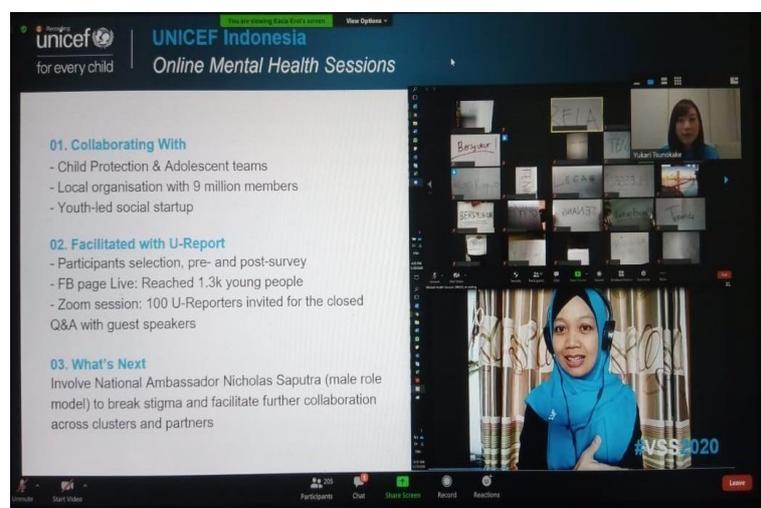
た。Facebook Live を通じて、1000 人以上にセッションを提供することができました（[活動記事](#)）。事後調査より、このような活動を継続する必要性を再確認できたことから、今後とも、SNS を通じたメンタルヘルスに関する知識の提供や、彼ら自身がこの問題領域における変革者となれるような青少年育成活動などを、新たな支援領域として展開することになりました。現在は、異なる UNICEF プログラムに参加している全国各地の青少年たちによる、メンタルヘルスの啓蒙活動向けの情報パッケージ作成を推進しているほか、複数のパートナー団体との新規事業の企画を進めています。

4. 海外派遣での感想は？一番印象に残っていることは？

1 年単位でのまとまった期間、業務経験を積ませていただいたことで、UNICEF という組織の事業運営や、特に青少年育成分野に関する知見がより一層深まりました。前述の通り、私のチームは独自で青少年育成活動を遂行するだけでなく、U-Report というツールを媒介に他のプログラムセクションの事業支援も行うため、部署の垣根を越えて多くの同僚と協業することが求められ、その業務範囲の広さと量の多さに日々追われながらも、UNICEF の青少年支援に様々な角度から貢献できているという喜びを感じました。

一方で、仕事の難しさを感じることも多くありました。その一番の理由は、赴任 3 か月でチームリードであったスーパーバイザーが家庭の事情で退職してしまい、イノベーションチームの同僚 1 人が異動、もう一人が退職となり、5 人だったチームがナショナルスタッフと私の 2 人になってしまったためです。チームリード不在の 2 名体制で、青少年育成活動の戦略作成などハイレベルの仕事から、他部署との連携業務、また日常的な U-Report の SNS 管理やシステム運用まで対応することとなりました。事務所の都合により当面リードの後任は予定されず、暫定のスーパーバイザーとされた「コミュニケーションチーフ」は、セクション内の 5 領域すべての管理業務が仕事であり、かつ青少年育成が専門の人ではなかったため、チームとしての活動するうえで多くの困難がありました。

しかし、状況を肯定的に捉えれば、本来はチームリードがやるべき仕事をナショナルスタッフと分担して取り組む機会が得られ、ある程度大きな裁量権をもち広範囲にわたって活動ができたので、その点では非常に良い成長機会にもなりました。特に、2020 年 3 月以降にインドネシアでも COVID-19 が拡大してからは、前述した通り新規キャンペーンやプログラムなどを自



Virtual Skill Share2020 におけるプレゼンテーションの様子

らが中心となって企画立案し、オフィス内外の多様な立場関係にある人々を多く巻き込み実施する仕事ができることは良い経験となりました。これらの活動を、UNICEF 本部がオンラインで実施するグローバル会合（Virtual Skill Share 2020）にて、世界中のスタッフ 200 名以上に対してプレゼンテーションをさせていただいたことも非常に印象深い経験となりました。

また、主な業務領域ではないものの印象に残っている仕事のひとつとして、国連と株式会社サンリオ間で締結された戦略的連携にまつわる調整業務があります。国連との提携のもと、ハローキティは YouTube チャンネルにてグローバルな SDGs 普及活動を行っており、SDG4（質の高い教育）をテーマとした動画をインドネシアで撮影することになり、私は、パートナーであるサンリオと日本語でコミュニケーションができることから、特別に任命され、担当させていただきました。具体的には、撮影をする幼稚園および中学校の選定から、当該地域の政府やフィールドオフィサーとの連携、撮影内容の調整など多岐にわたりました。準備を進める上では、NY 本部、サンリオ、現地の学校など多数の関係者間の調整が必要で、撮影当日までの約 2 か月間、一定の労力が必要とされましたが、無事に YouTube の Hello Kitty Channel に[完成動画](#)が掲載された時には大きな達成感を味わいました。



撮影を行った幼稚園の先生と園児たちと



撮影を行った中学校にて



UNICEF インドネシア事務所での撮影実施後、スタッフ一同で記念撮影

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

海外派遣終了後の国連ボランティアとしての契約延長が決まったため、引き続き UNICEF インドネシア事務所にて青少年育成領域の仕事に従事します。私が、ちょうどインドネシアでの COVID-19 が拡大するタイミングで一度日本に帰国して以来、事務所が大半のスタッフのテレワーク体制を継続中のため（6月現在）、本事業での派遣期間中最後の3か月は東京からテレワークをさせていただいており、この状態がまだもう暫くは続くと思込んでいます。WhatsApp や Zoom などオンラインのコミュニケーションツールを活用しながら仕事をしてはいますが、まだインドネシアではパンデミック対応の体制が続いていること、また、テレワークだと物理的に「事務所から退社する」ということがないため、長時間労働になりやすいので、土日は絶対必要な業務以外の仕事はしない、と決めてきちんと休息を取ることが大切だと感じています。仕事内容としては、青少年支援の中でも特に重要度が増している青少年のメンタルヘルス領域の支援拡大に貢献しつつ、今後は、地域としてかねてから関心の高い中東のシリア周辺地域の支援活動にも携わっていただきたいと思います。

6. 事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

国際機関でのキャリア構築を目指すうえで、特に民間企業からキャリアをスタートした方にとっては、私もそうだったように、どのように類似経験を積むかというのはよく悩む点だと思います。本事業に参加することで、外務省、HPC、UNV の手厚いサポートの下、国際機関での業務に必要な知識と実務経験を積むことができます。また、壁にぶつかったときに相談できる同期研修員や先輩方との出会いもこの事業の大きな魅力の一つです。その後のキャリアを切り開くうえで、きっと有益な機会になると思いますので、是非積極的に挑戦してみてください。